

切

り立った岩が海に迫るリア
ス式海岸。そのなかでも、
大きく口を開いた山田湾は穏やか
な入り江として知られる。ここを
世に知らしめた出来事がある。

湾の沖に浮かぶ大小2つの島の
うち、大きい島はオランダ島と呼
ばれる。命名の契機は1643年
に起こったオランダの探検船ブレ
スケンス号の漂着だ。鎖国が始ま
った江戸時代、外国船の入港は長
崎の出島以外禁じられていた。そ
れでも山田の民は水と食糧を求め
て上陸した船員をもてなした。

探検に戻ったブレスケンス号だ
が、山田の厚意に気を良くして1
ヵ月半後に再入港。しかし、こん
どは南部藩の策略で船員は捕らえ
られ江戸に護送された。この出来
事から370年の時を経た今、山
田町とオランダ・ザイスト市は友
好都市として交流が続いている。

◆自力で住まいを再建する住民

東日本大震災による津波は普段
は穏やかな山田湾も襲った。追い

と考えました。そのために必要な
資金の一部は町と県で用意し、金
利の支援も提供する予定です」
住民の生活の安定と定着率の向
上を考えれば当然の方針だ。町民
も別の理由で自力再建を選ぶ。60
年に嫁いで以来50年にわたって織
笠で生活する菊地サカエさん
(80)もその1人である。
「アパート生活をしたことがない
し、壁の薄い仮設住宅も嫌。小さ

山田湾から織笠川が横切る織笠で
急ピッチで進む復興作業。

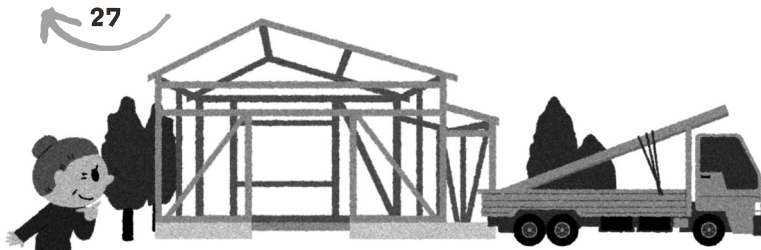


地域の住民による自力再建

やまだまち
岩手・山田町震災復興事業 (2013年◆平成25年から実施中)

変わる日本の
「暮らし」と「まち」

27



新田匡央
につた・まさお

illustration: Shigeyuki Sakata

討ちをかけるように発生した火災
が被害を拡大させる。町の中心の
陸中山田駅周辺の10haと町役場周
辺の6haが2日間にわたって燃え
続けた。山田町全体では半数以上
の家屋が被災し、8000人を超え
る犠牲者を出した。

悲しみを乗り越え、まちは復興
へ向けて動き出す。津波から命を
守り、産業を再生し、住民主体の
地域づくりを基本理念とした。パ
ートナーに選ばれたのはUR。山
田復興支援事務所の國澤正明は震
災から1ヵ月後に山田に入り、そ
の日から1週間、津波到達点をし
らみつぶしに歩き回った。

「復興を考えるうえで、今回の津
波の高さをどうとらえるかについ
て考え続けました。答えは津波の
来ない高台への移転でした」

山田町の選択も、高台移転と盛
土による嵩上げだった。しかも山
田、大沢、織笠など、いくつかの
地区ごとに移転する計画だ。これ
には理由がある。山田町は19
55年に町村合併が行われたが、

目指している。再興はおよそ2年
後の予定だという。

山田には、過疎化が進むまちを
活性化しようと、地場の若者らが
立ち上げた「やまだ夢プロジェクト」がある。そのスタッフのひと
りが椎屋百代さんである。地場の
ビール会社とコラボし、海辺のカ
キ小屋でビールを飲みながら地元
のカキを食べるイベントなどを成
功させてきた。

「こういう活動は、なかなか実現
しないものです。でも私たちはや
ると言ったら必ずやるんです」

椎屋さんが復興への思いを強く
したのは、震災3日後に再開した
地元スーパリーの専務の言葉だ。
「じっとしていても仕方ない。動
いていけば、何かが起こる」

自分に何ができるか。椎屋さん
は当時所属していた観光協会のブ
ログでの情報発信を思いつく。

椎屋さんは、支援者が提供した
物資をブログにアップ。ギターな
どは生活必需品ではないが「ギタ
ーが流されて困っていた」と受け

それぞれの地区は成り立ちも特色
も異なる。漁業権も居住が条件に
なるので、住み慣れた地区を離れ
るといふ選択肢はない。現山田町
長の佐藤信逸さんはこう語る。

「復興への道のりはたいへんなこ
とが多い。でも、次の山田町を担
う若い人が20年後に『このまちで
よかった』と思ってもらえるよう
なまちづくりをしたいですね」

織笠地区は、カキやホタテなど
養殖業が盛んだ。震災時には中心
を流れる織笠川を津波が遡上、半
数以上の家屋が流された。津波へ
の恐怖心は強く、住民は「海は見
たくない」と高台移転を望む。移
転にあたって、佐藤町長は住民に
よる自力再建を推奨した。

「小さくても楽しい我が家を、な
るべく自前で建てていただきたい
取る被災者の笑顔が嬉しかった。
夢プロジェクトの面々は、地元
で商売を営む若手が中心だ。彼ら
はまちの中心となる駅前商店街の
復興を願うとともに、まち全体の
更なる復興と発展を目指す。その
ひとつが、中心部とは別の場所に
新たな商店街を建設することだと
いう。椎屋さんはこう語る。

「商店街は買い物するだけの場所
ではなく、地域住民の憩いの場
でもあると思うんです。まちの人々
が全員で協力し合うことで、もう
一度山田に人が戻ってくることを
願っています」

震災前に1万9千人だった町の
人口は、現在1万7千人を割って
いる。安心して住
める場所が1日も
早く完成し、まち
に憩いの場となる
商店街が復活すれ
ば、かつてのよう
な賑わいも戻って
くるのではないだ
ろうか。



街に、ルネッサンス



一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
[企画制作]新潮社